

### 3 世界の舞台を目指すアスリートの発掘・育成の重要性と指導者の役割

育てるべきトップアスリートとはどのような存在であるべきなのだろうか。

国際オリンピック委員会（IOC）は2009年10月コペンハーゲンにおいて、オリンピック・ムーブメントの立場を再認識することを目的とした大規模な会議（オリンピック・コングレス）を開催し、「社会におけるオリンピック・ムーブメント」を発表した。その中で、スポーツは「良き方向へと導く（推進）力」であり、「平和、文化、教育を推進する手段」であると明記された。また、「すべてのアスリートはオリンピック・ムーブメントの中心である。彼らは、各国のクラブ、国内／国際競技連盟、国内オリンピック委員会（NOC）をはじめとする幅広い組織に支えられている。社会のお手本たるアスリートは、地域社会でスポーツやレクリエーションの認知度を高め、これからの世代の旗手となることで、オリンピック・ムーブメントに大きく貢献することができる。アスリートは21世紀を通じて、スポーツの構築・発展に不可欠な役割を果たすべきである」と述べられている。

表1は、国内外のスポーツ統括組織における文献において「トップアスリートの社会的存在意義」がどのように語られているのか、関連する内容と思われる一部を抜粋して紹介したものである。

ここでは、表1を参考に、トップアスリートを育てるこの社会的意義について、その視点や論点を整理するとともに、具体的にどのような意義があるのか考えてみよう。

「勝つためにはゴールラインを最初に超える必要があるが、チャンピオンになるということは、身体的な能力だけでなく、あなたの人格への賞賛も呼び起こさなければならない。もし同世代のロールモデルとして皆さんが振舞う準備ができたのであれば、順位に関係なく皆さんはチャンピオンになるだろう」

ジャック・ロゲIOC会長：  
2010ユースオリンピック開会式

#### 1 偶発性の最小限化

UK Sport(英国のエリートスポーツ政策を担う非省庁公的機関)でHead of Athlete Developmentを務め、世界各国から注目を集める「タレント発掘・育成プログラム」を推し進めるチャルシー・ウォーは、「スポーツの成功における偶然的要素の最小化」という視点で、世界の舞台を目指すアスリートの発掘・育成の重要性について考えている。ウォーが、「自分がど

表1●トップアスリートを育てる社会的な意義について（文献抜粋）

■スポーツ基本法（平成23年法律第78号）

開催される偉大なスポーツの祭典、オリンピック競技大会で頂点に達する。そのシンボルは、互いに交わる五輪である。

■スポーツ宣言日本（日本体育協会・日本オリンピック委員会、2011）

現代社会におけるスポーツは、オリンピック競技大会等の各種の国際競技会において示されるように、人類が一つであることを確認し得る絶好的の機会である。したがって、スポーツが、多様な機会に、グローバル課題の解決の重要性を表明することは極めて重要である。

■JOC ポリシー・ステートメント（日本オリンピック委員会、2011）

オリンピックに関わる者は真に国民の代表であり、各國・地域の代表選手団と共に競い合うとともに、地球人としてグローバルな課題に向き合い、一般社会における調和的発展のために尽力することが求められる。

進化する今日のグローバル社会において、日本がオリンピック競技大会に参画するだけの時代は終わった。日本は、国際社会のリーダーであり豊かなスポーツを推進することを目指す国である。我々はオリンピズムを守り、発展させていかなくてはならない。

■社会におけるオリンピック・ムーブメント（IOCコングレス提言、2009）

すべてのアスリートはオリンピック・ムーブメントの中心である。彼らは、各国のクラブ、国内／国際競技連盟、NOCをはじめとする幅広い組織に支えられている。社会のお手本たるアスリートは、地域社会でスポーツやレクリエーションの認知度を高め、これからの世代の旗手となることで、オリンピック・ムーブメントに大きく貢献することができる。アスリートは21世紀を通じて、スポーツの構築・発展に不可欠な役割を果たすべきである。

れほど優れているかに気付いていないアスリートが多くいる。彼らをしっかりと計画されたプログラムへと取り入れて、ハードワークを積み重ねれば、メダル獲得の可能性は現実味を帯びてくる」というように、現在、オリンピック競技大会で繰り広げられる国単位でのタレント発掘・育成プログラムによるメダル獲得競争は、「偶発性の最小限化」への戦いであるともいえる。

### 1) タレント発掘・育成とは何か

オリンピック競技大会や世界選手権などの国際競技大会でのメダル獲得を目指し、世界各地でタレント発掘・育成プログラム (Talent Identification and Development = TID) が展開されている。

今日的なTIDとは、「メダル獲得の可能性を有する選手を、より多くの候補者の中からコーチの目と科学的な手法を用いて識別 (Identification) し、系統立てられた競技者育成プログラムの中で組織的かつ計画的に育成 (Development) することであり、メダル獲得のための新たな資源戦略であると考えられている。

「識別」は、「あるスポーツで成功する素質のある者を識別するために、競技経験の有無を問わず、いくつかのテストにより篩 (ふる) いにかけること」と定義づけられ、「特定のスポーツで成功すると考えられる競技者を識別するために、コーチの経験やテストにより、現在あるスポーツに参加している競技者をスクリーニングすること」と定義づけられる「選抜 (Selection)」とは明確に区別できる。このことから、既存の競技者層からではカバーしきれない人材群から、優れた素質を有する競技者をみつけ出す可能性を高めることができる。

きるということが、識別の有用性として考えられる。このような有用性を活かして、競技人口の少ない「そり系の競技（スケルトン、ボブスレー）」では、TIDが積極的に行われており、世界トップクラスの人材を多く輩出している。

### 2) タレント発掘・育成の国際動向

TIDを経て育成されたアスリートは、競技開始から短期間でトップレベルの競技者へと成長するケースが多い（表2）。また、それらの成功事例には、2つの特徴がみられる。1つは、多くの成功事例が女子種目であること。もう1つは、クローズドスキル<sup>1</sup>の種目での成功事例が多いことである。

これは、イギリスやオーストラリアなどのTIDを先進的に推し進める諸外国では、TIDをナショナルプロジェクトとして公費により展開し、優れた素質を有する競技者に対しての短期間の投資により最大の成果（オリンピックでのメダル獲得）を挙げることを目的として行われている（この考え方は、「Fast Track」と呼ばれている）ことに起因する。公費を用いて事業展開されることにより、事業主体者への説明責任が生じ、高い透明性や費用対効果が求められるのである。

そこで、短期間に効果的に成果を挙げるために、競技者の競技への能力適性が見極めやすい「クローズドスキル・スポーツ」をターゲットとして、タレント発掘・育成事業に取り組んでいる。

また、それらの国では、戦略的な資源の「選択と集中（ターゲット化）」のもと、クローズドスキル・スポーツの「女子種目」が、TIDの効果が最大限に発揮できるマーケットであると考えているのである。

また、素質を有する競技者を識別し、系統立てられたプログラムで組織的かつ計画的に育成することによって、2つの競技で成功を収める事例もある。

アテネオリンピックのボート競技（女子クオドルプラスカル）で銀メダルを獲得したレベッカ・ロメロ（イギリス）は、アテネオリンピック後に自転車競技への転向を行い、北

<sup>1</sup> クローズドスキル  
比較的安定し予測しやすい状況下で發揮され、環境に影響を受けない技術。その技術発揮には状況判断や戦況判断を含まず、開始と終了がはっきりとしている。（Knapp, 1963）

表2●主なTID出身者の主な成績と競技年数

氏名（国名）	性別	競技	主な成績（オリンピック）	競技年数
ヘレン・グローバー（イギリス）	女	ボート	1位（ロンドン）	約3.5年
ジョン・モンゴメリー（カナダ）	男	スケルトン	1位（バンクーバー）	約8年
エイミー・ウィリアムズ（イギリス）	女	スケルトン	1位（バンクーバー）	約8年
ヘザー・モイズ（カナダ）	女	ボブスレー	1位（バンクーバー）	約8年
レベッカ・ロメロ（イギリス）	女	自転車	1位（北京）	約3.5年
シェリー・ルドマン（イギリス）	女	スケルトン	2位（トリノ）	約3.5年
ナナ・デービス（オーストラリア）	女	ボート	3位（北京）	約8年

京オリンピックでは金メダル（女子個人追い抜き）を獲得した。また、バンクーバーオリンピックボブスレー競技で金メダル（女子2人乗り）を獲得したヘザー・モイズ（カナダ）は、ラグビーのカナダ代表であり、女子ラグビーワールドカップ（2010年）の最多トライ獲得者でもある。

ロンドンオリンピックに向けて、開催国のイギリスは、長身者を対象にした「Sporting Giants（2007～）」や女性アスリートに限定して発掘・育成する「Girls4Gold（2008～）」など、7つのTIDプロジェクト（うち1つはパラリンピックアスリートの発掘、育成）を企画、運営した。その中で、7,000人の対象者をテストし、100人以上を育成システムに参加させ、49人の選手が17競技で269の国際競技大会に出場し、99個のメダルを獲得した。また、ロンドンオリンピックには、10人の選手が出席し、1つの金メダルを獲得している。

### 3) タレント発掘・育成における

#### 世界基準の要件

前述のように、タレント発掘・育成プログラムは、オリンピックでのメダル獲得競争での「僅かな差」を生み出す戦略のひとつであるといえる。「僅かな差」を生み出す世界基準のタレント発掘・育成プログラムを概観すると、以下のような備えるべき要件が考えられる。

- 明確な達成目標（ゴール）設定
- 明確なプログラム（事業）コンセプト
- 明確な責任の所在と役割分担
- プロフェッショナル（専任）スタッフの配置  
明確な達成目標を設定し、明確なプログラムのコンセプトを示し、事業展開の責任の所在と役割分担が明確な中、（専任の）プロフェッショナルスタッフがプログラムを運営することが、世界基準のプログラムとなるための必要条件である。

### 4) 我が国のタレント発掘・育成

2013年1月時点で、独立行政法人日本スポーツ振興センター（JSC）は、日本オリンピック委員会（JOC）と共に、国際競技力向上に資する12の地方自治体と連携し、タレント発

掘・育成事業を行っている。

2000年に文部科学省（当時、文部省）によって定められた「スポーツ振興基本計画」に基づき、国立スポーツ科学センター（JISS）と地域が連携して実際に何ができるかということを検討していたJISS内の地域連携プロジェクトに、JISSとJOCが今後の国際競技力向上のための方策として重要と考えた長期的な観点からタレント発掘・育成を諮詢（はか）ったことが、我が国のタレント発掘・育成事業の始まりである。この後、2003年9月より実現に向けての検討を重ね、2004年11月に「福岡県タレント発掘事業」が立ち上がり、現在の12地域にまで広がっている。

## 2 トップアスリートを育てる 指導の実践にあたって

卵が先か、ニワトリが先か。昔からある議論ですが、私はニワトリが先だと答えます。しっかりとした親鳥がいなければ、卵から生まれたヒヨコはきちんと育ちません。つまり、育てる側が大事なのです。せっかくいいヒヨコであっても、活かすかどうかは親鳥次第であるのです。

自分のまわりにいい部下がないと思うのなら、それはあなた自身がいい上司ではないのでしょうか。親鳥が未熟なのです。

（上村春樹）

「世界のどのチャンピオンもはじめはただの赤ん坊（体操元ロサンゼルスオリンピック監督：阿部和雄）」という言葉がある。すべての人間が最初から一人で立ち歩けないように、国際舞台で活躍するトップアスリートも皆、最初から自分自身の可能性を知り、何をなすべきか、自主的かつ積極的に取り組む方法を知っていたわけではない。

また、世界の競技レベルは日進月歩で向上し、アスリート自身の課題も日々変化するため、アスリート本人が、自らの状況を的確に把握し、適切な対策を講じることをすべて自分一人で行っていくことは現実的に不可能な

ことである。

トップアスリートの歩みには、彼らの高い素質をみつけ、育て、開花させる支援者が不可欠である。

「コーチの評価は、選手の向上にどれだけ寄与できたかであり、どのレベルを指導しているかではなく、それぞれのエイジグレード（年齢区分）の大会で何回勝たせたかではない」。これは、アメリカ・スポーツの強化の中心的拠点ともいえるUSOC（全米オリンピック委員会）オリンピック・トレーニングセンターで、一貫強化システムを支えた関係者の言葉である。

### 1) スポーツ教育プログラムの必要性と

#### その概要

～トップアスリートを目指すものには、  
学んでおくべきことがある～

スポーツ競技において高い成績を収めるためには、各種目に対する高い技能を有していることが必要不可欠となることはいうまでもないが、その他にも、体力、精神力などは競技能力との関連性がきわめて高いことが知られている。しかし、この他にも実際に競技で成功を収めた競技者のインタビューなどからうかがい知ることは、その競技に対する、あるいはスポーツ全般に対する高い知的能力である。知的能力とは非常にあいまいな表現であるが、自分を客観的にみつめることができる能力や人とかかわり合い、円滑な関係を構築することができるため必要とされるさまざまなスキルなどがこれに当たると考えられる。これは決して一朝一夕に身につけられたものではなく、深くかつ長い競技経験に裏打ちされたものであると考えることができる。しかし、このスポーツに関連する「知的な能力」はスポーツに対して高い動機付けを保ちつつ、それに豊かにかかわるための鍵となることは万人がうなずくところではないだろうか。可塑性の高いジュニア期の年代のうちから、スポーツの価値やそれにつながるさまざまな活動を経験することは、真のトップアスリートを育てるための必要条件であると考えることができる。

これらを具現化し、実際にプログラム化する際に、三つの大きな柱となる力が重要な視点となる。一つは、人との円滑なコミュニケーションがされることやチームの中で自分の能力を発揮したり、他者に配慮するために必要とされる人間力（Human Skill）、二つ目は自分自身の能力を客観的に把握したり、問題点を掘り起こしたりすることができる能力としてのコンセプチュアルスキル、もう一つは、科学情報を自分のために有効に活用したり、自分自身で競技環境を整えたりすることができる能力としてのマネジメントスキルの三つである。

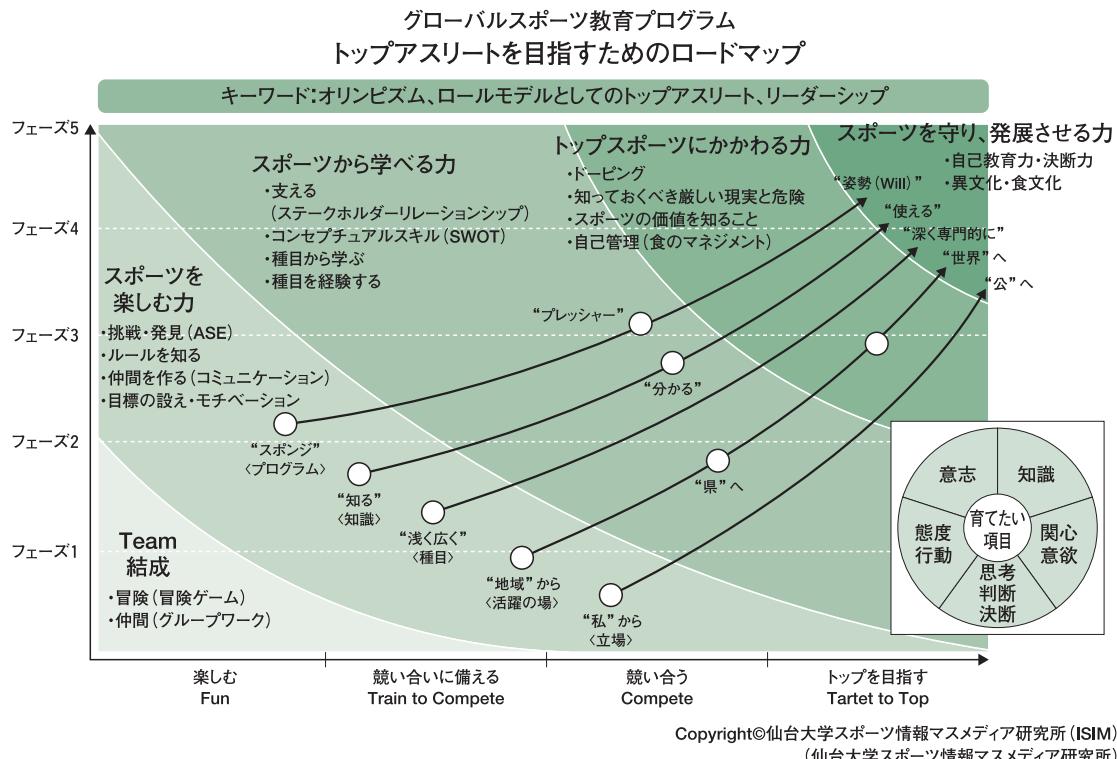
### 2) 世界を目指す競技者育成のための

#### ロードマップ

上述の要素を考慮し、真のトップアスリートを育成するためのプログラムを、「スポーツ教育プログラム」としてさらに具体化し、それぞれの内容を、受講者の学年や到達しようとする目標に応じてロードマップにしたものを見図に示した。

図1の縦軸は年齢や学年あるいはスポーツに取り組むレベルなどによって分けられた「フェーズ（局面・段階）」を示しており、横軸は対象となるジュニア期のアスリートに身につけてもらいたいスポーツに臨むために必要な「態度や心構え」を示している。各フェーズを横軸と平行な線で切り取ると、提供されるプログラム内容における学んで欲しい態度や心構えの比率がフェーズ毎に分かるように作成されている。たとえば、フェーズ1はプログラムの導入段階にあたり、グループワークによって仲間を知ることによってプログラムを通じてスポーツを楽しめる基礎を築く段階の比率が高くなっている。これと比較して、フェーズ5では、トップを視野に入れたアスリートとして必要とされる自己教育力やスポーツに対する責任、異文化への理解などの比率が高まっている。体力あるいは技術トレーニングの質が競技水準によって異なるように「スポーツに対する心構え・態度」も変化していくことを前提としてプログラムは計画されている。

図1●世界をめざす競技者育成のための教育プログラム（コンセプト・マップ）



図の中央に、左下から右上に描かれた矢印は、フェーズによって変化するアスリートの立場や必要とされる資質などを示している。「立場」は「私」的にスポーツを楽しむレベルから国や地域を代表する「公」的なアスリートのそれへと変化する。また、「プログラム」を学ぶことによって身につけて欲しい資質は、フェーズによって「スポンジ」、「プレッシャー」、「姿勢 (Will)」へと変化している。これは、スポーツを学ぶ初期の段階では「スポンジ」のようにさまざまなことを吸収する姿勢が重要であり、次に、強い「プレッシャー」のかかる場面で発揮できるようになり、さらには真のトップアスリートとなるために強い「姿勢 (Will)」を持たなければならないことを示している。

また、図中に「コンセプチュアルスキル (SWOT)」などと示されているのは、プログラムの内容である。これらがワークショップ形式で提供される。本プログラムは、単なる講義形式で知識や情報を提供するばかりではなく、実際に行動することによって意思、意欲、態度、関心、思考といった全体的な働き

かけを受講者に対して行なうことによって、ジュニア期にあるアスリートの総合的な発展を企図している。

このように、発掘したジュニア期のタレントを計画性、継続性のあるプログラムによって育成しようすること、さらに、このプログラムの中にスポーツの知的要素をトレーニングするための内容を盛り込んでいることはまさしく「ジャパン・オリジナル」ということができるだろう。

図1のようなロードマップを参考に、トップアスリートを育てるために発育発達や競技のレベルに応じて、どのような指導が展開されるべきなのか、長期的な視点からトップアスリートの指導実践の在り方について考えてみよう。

### 3) ユースオリンピックとスポーツ教育 プログラム～真のチャンピオンを 育てるチャレンジとは～

国際オリンピック委員会 (IOC) は2010年8月、シンガポールで第1回「ユースオリンピック競技大会 (YOG)」を開催した。IOCは「YOGはすべての若者に対する教育およびス

ーツプログラムの提供水準を世界的に高め、若者向けの教育およびスポーツプログラムに関するIOCおよびオリンピック・ムーブメントの今後の活動を決定する、近代オリンピック・ムーブメントの歴史上比類のない機会である」と述べている。(IOCオリピックコンгресス提言、2009)

ジャック・ロゲIOC会長はYOG閉会式の挨拶において、「選手の皆さん、私たちはあなたのこととき誇りに思う。皆さんは眞のチャンピオン（true champion）とは単に試合の勝者（winner）であるだけではないことを理解したことだろう。あなた方は新しい世代の一員として、オリンピックの価値を継承しようとしていることを見せてくれた」と述べた。この言葉にはどのような意味や思いが込められていたのだろうか。

YOGのビジョンは、スポーツと文化、教育を統合することにある。「卓越（Excellence）」「友情（Friendship）」「尊重（Respect）」というオリンピックの価値を若き選手たちが受け入れていく上で、「文化・教育プログラム」（CEP）はYOGにおいて不可欠な要素となっている。IOCが大会参加者に対し、競技終了後も閉会式まで選手村に滞在してさまざまなCEPに参加することを義務づけたことはそのためであった。

たとえば、このCEPを構成する要素の一つである「ディスカバリー活動」では、国際機関の協力のもと、ワークショップが行われたり情報の展示がなされたりした。このプログラムは、選手がそれぞれの国や地域のリーダーとして活躍していく上で重要なテーマを探求することを狙いとしている。

その一つである国際連合児童基金（UNICEF）が提供するプログラムでは、選手たちは円形に配置されたクッションに腰をかけ、国連スタッフの進行で行われる「HIV（エイズウイルス）」に関するセッションに参加した。リラックスした雰囲気の中にありながらも、重要な世界的問題についての見識を深めてもらう工夫がなされており、スポーツをキーワードに集った若いアスリートたちに世界的な問題

に対する意識や発想の窓を開くための取り組みとなっている。

その他、世界各地の芸術や文化への認識や理解を深める「ワールドカルチャービレッジ」や地域住民との共同活動を通じて自分自身の社会での求められる役割について考える「コミュニティプロジェクト」、環境問題について世界の仲間と考える「探検旅行」、一日かけて離島に出向き信頼関係や友情に支えられた課題克服のためのチームワームの重要性を体感する「アイランドアドベンチャー」などが行われた。

「僅かな差」を競い合う拮抗した国際競技水準の中で、エリートスポーツがパフォーマンス向上とその発揮に焦点を当てた取り組みを進展させる時代にこのようなコンセプトの大会が創設されたことの意義は大きい。トップアスリートが「いかに勝つか」ということを考える時、ロゲ会長の残した言葉には多くのメッセージが込められている。それを具現化したものが「文化・教育プログラム」であった。

#### 【参考引用文献】

- 1) 勝田隆, 栗木一博, 阿部篤志：トップアスリートの育成とスポーツ教育プログラム. 月刊自治フォーラム. 第一法規株式会社. 8~13頁. 2011
- 2) 山下修平：タレント発掘・育成事業の今日的趨勢. JISS
- 3) 和久貴洋：地域と連携して「世界」を目指す. トレーニングジャーナル, 2009, 5, 18-22
- 4) A.M.Williams, T.Reilly : Talent identification and development in soccer. Journal of Sports Sciences, 2000, 18, 657-667.
- 5) R.Vaeyens, M.Lenoir, A.M.Williams, R.M.Philippaerts : Talent identification and development programmes in sport. Sports Medicine, 2008, 38 (9), 703-714.
- 6) UK Sport. Girls4Gold [Online]. Available from URL: <http://www.uksport.gov.uk/pages/girls4gold> [Accessed 2013 Jan 15]
- 7) Rebecca Romero.co.uk. Rebecca Romero Olympic Champion [Online]. Available from URL: <http://www.rebeccaromero.co.uk> [Accessed 2013 Jan 15]
- 8) International Rugby Board. Women RWC [online]. Available from URL: <http://www.rwcwomens.com/statistics/index.html> [Accessed 2013 Jan 15]
- 9) UK Sport. deng joins call for tall and talented [online]. Available from URL: [http://www.uksport.gov.uk/news/deng\\_joins\\_call\\_for\\_tall\\_and\\_talented](http://www.uksport.gov.uk/news/deng_joins_call_for_tall_and_talented) [Accessed 2013 Jan 15]
- 10) Jason Gulbin (2012), Applying talent identification program at system-wide level., Joseph Baker, Talent identification and development in sport international perspectives., pp147-165. USA, Routledge.
- 11) Australian institute of sport, NTID Year in Review July 2009-June 2010.
- 12) Barbara Knapp. Skill in Sport: The Atrainment of Proficiency. Routledge & Kegan Paul, 1963